

脱獄情死行

平 龍生

あの人のために自由が欲しい！
女死刑囚の決死の脱獄劇。
選考委員激賞の新人、
衝撃のデビュー作！

目次

- 第一章 戦時下犯罪
- 第二章 鬼畜の森
- 第三章 脱獄行・つめ落とし作戦
- 第四章 情炎の宴
- 第五章 忌避者の青春
- 第六章 愛は奪われて行く
- 第七章 炎の記憶

第一章 戦時下犯罪

1

低い菊水山系の山々が背後には立ちほだかっている。さらに北に踏み込めば、六甲の山脈が東西にと山の壁を張り巡らせていた。神戸市街の西北部、山の極まつた一郭に北神拘置所はあった。

昭和二十年二月五日。戦時刑事特別法に問われ、一人の女が送られてきた。

殺人・死体遺棄・放火の罪状が付されていた。

尾形玉江、二十六歳。兵庫県城崎、日高の出身で、前歴には体を売った一時期もある女であった。

灰色の車体をした木炭バスが寒風を切って突きすすむ。もつとも、それほど威勢のいい姿ではない。

窓には鉄格子が嵌められていたので護送車であることはわかるが、のろのろとした動きは死に瀕した甲虫の這行はこうのようでもあった。

青い煙を後部の燃料エンジンから吐き出している。

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃による開戦以来、ほぼ三年が経過していた。

すでにサイパン島の日本軍は玉砕、B29の前進基地ができ、本土空襲は日常化していた。神戸の街にも十九年の暮れには米軍偵察機が九機飛来、その前触れどおりに、昨二月四日、市内数か所に二七キロ焼夷弾、爆弾などが投下された。いよいよ、神戸工業地帯にもアメリカ空軍の手は伸びてきたのだった。

尾形玉江の斜め前の席に共犯者の花房栄一がいた。右手は義手なのに、かつちりと両手錠が噛まされていた。

腰縄姿もどこか痛々しい。終始、花房は顔を上げなかつたが、玉江は平然としていた。護送車の窓からら湊川の街並みをあかず眺めていた。

湊川トンネルの暗い隧道ずいどうを抜ける。

市電が護送車に平行するかたちで背後についた。

パンタグラフの揺れが伝わり、青白いスパークの火花が市電の天井で散った。

二人を乗せた車は右と折れる。神有電鉄 現・神戸電鉄の湊川駅が右手に見えた。

ここから急な坂道になった。

木炭車は喘ぎ喘ぎ坂道を辿り始める。

湊川公園の西南隅に建つ湊川タワーが背後にあつた。正式名は神戸タワーと称された新開地名物の一つで、高さは九十メートルは優にある。

塔のてっぺんに上れば中国七州でさえ見ることが出来ると言われた当時としては東洋一の高い塔であつた。敵機の恰好の目標になるので、今、取り壊す話が出ていた。湊川タワーにちらと玉江が視線を投げたのは、神戸の西の歓楽街、新開地にはそれなりの思い出があつたからだ。

「おい、殺しをやつとるのにきさま何とも思うとらんのか。なあ、おまえら二人とも国賊や。切り裂いても腹の虫がおさまらん。ええ、おまえ、おまえのことや、女のくせして」

護送の巡查の一人が声を荒らげた。面を上げたままの玉江の態度に癪かんを立てたのだ。花房は神妙にしていたから罪を悔いているように見えたのだが、玉江は不逞の輩やからと映つたにちがいない。

玉江は聞き流した。

「なあ、いまは戦時中や、燃料かて足りんのお前らを送り迎えや。ええかげんにせえ」「お前が男なら敵の弾当てに最前線に出したる。どうせ人を殺したら死刑じや。同じくつちやろ」

もう一人の巡查が毒づく。それでも玉江は知らぬ

顔を極め込んでいた。他のことを考えていた。

さつきから花房の視線が自分の下半身に注がれていた。上眼づかいの男の視線にはどこか切実なものがあつた。外の景色に眼をやりながら、玉江はモンペ姿の下半身を少し開き加減にしてやつた。

この、女の武器で、この男を殺人者に仕立て上げた。玉江は抜けるように色が白く、豊満な肉体を持つていた。男好きのする色香にまどわされ、これまでに何人もの男が玉江の餌食になつた。

花房栄一も、そのうちの一人ということになる。

坂を登り詰めると、やつと車が一台通れるほどの狭い路になつた。せせこましい感じで軒を並べる民家が道の両側に張りついている。

前方に赤煉瓦塀の障壁が望めた。

北と向えば山の方角、そして南側は瀬戸内の海、東西に細長く伸びるのが神戸の街のたたずまいである。

周囲を赤煉瓦塀に囲まれた北神拘置所は、まわりが八百メートル、ほぼ正四角形の領域内に何棟かの獄舎があつた。

明治の遺構を思わせる赤煉瓦塀の高さは五メートルはある。一度、塀の中に入れば二度と抜け出せないほどの威圧感があつた。

刑務所ではないから、刑が確定するまでの仮り住まいであつたが、北舎の一郭には受刑者も収容されていた。戦時下のことで看守不足のため、刑務支所の施設としても利用されていたのだつた。

正門の扉が開かれる。さすがに玉江も唇を噛んだ。なぜか寒さを感じ、体を震わせた。

護送車が正門奥の第一看守詰所まで進んだ時、眼の前で、思わぬ出征風景に出喰わした。

とつぜん、中仕切りのもう一つの鉄門の向うから「バンザイ、バンザイ」の声が沸き起つた。

それで、護送車はしばらく足止めを喰う。

鉄門の向うにいくつもの収容者の顔があつた。

五メートルほどの高さのコンクリート塀から向うの領域が囚われた者たちの居住区となる。

外部との接触を絶つために内壁が設けられていたのである。

正門に詰めている看守の表情も、どこか浮き立って見えた。

「ここからも出征兵士を送ることになりました。名誉なことです」

護送車から降り立つた巡査との間でそんな会話が取り交わされた。刑期満了を待たずして受刑応召者が戦地に送られていた。

一度は不合格ではねられた丙種合格者も狩り集められて、兵役に就かされていた時代のことである。

勝つてくるぞと勇ましく

誓つて国を出たからは

手柄たてずに死なれよか…

内堀の中扉が開かれ、二名の出征兵士が、看守に導かれて姿を現わした。その背後で、受刑者たちが仲間を送る歌を唄っていた。

玉江の眼にも二人の受刑応召者の姿は見えた。

白いタスキを肩から斜めに掛けている。ちゃんと二人の名前も読めた。

「いろいろお世話になりました。どうかお体に気をつけてください。日本男子として立派に戦つてまいります」

二人の男は衛門の看守に挙手の礼をしてから正門の外に消えた。男たちは眼に泪さえ浮かべていた。

もう、騒ぎはおさまっていた。

所定通りの引継ぎ事務が終り、花房栄一と尾形玉江は別々の監房に移された。

やはり、花房栄一は自分を罪に導いた女にちらと視線を送ったが、彼女は無表情を装った。

もう、男と女の感情は薄れていた。

冷え冷えとした長いコンクリート道の廊下を何度か右左に曲がつて進む。そのたびに、鉄門があり、開錠と施錠の音が冷たく響いた。

アリ一匹、這い出すことのないように、建物の内部は二重三重の防護の構造を持っていた。行き着いた先は南舎の独居房であつた。

所定通りの引継ぎ事務が終わり、花房栄一と尾形玉江は別々の監房に移された。

やはり、花房栄一は自分を罪に導いた女にちらと視線を送つたが、彼女は無表情を装つた。

二人の間の男と女の情は薄れていた。

行きついた先は南舎の独居房であつた。独居房に入る前に手錠が外され、別室で身体検査をされる。部屋に入ると脇の机を前に老看守が坐つていた。

着衣をとるよう命ぜられた。女看守が立ち合つたが、男の視線にさらされることには変りはなかつた。

だが、玉江はためらいは見せなかつた。

手際よく着衣を脱いだ。

「はい、こちらを向いて」

女看守が事務的に告げた。

肌着を捨て上半身裸になる。モンペにも手を掛けた。

「ぜんぶ脱ぐのよ」

と、言われて玉江はズロースに手を掛けた。

さつと取り払つた。豊かな腰が露出された。

玉江は男の老看守の視線がその下半身に注がれていることを知っていた。

“なんとかしてここからは逃げてやる”

護送車の中でも考えたことだった。老看守が彼女の担当になることは初めに知らされた。

メリヤスの肌着を頭からすっぽりとつた時、ヘヤーピンが一本、毛髪にからみついたのに気付いていた。手で髪にふれる仕種をし、床に落した。

老看守の眼が背後にある。

机の前の担当看守の位置からは玉江の股間は丸

見えのはずであつた。

むりに折つた上体を横にずらした。

乳房をも、その視野におく。

鉛筆を持った右手を固く握り締めたまま、老看守はこの挑戦的な新入りの大胆なポーズに、思わず、眼をしばたいた。

ほんの数秒のことであつた。のろのろした態度で着衣を拾う。向き直つた時、玉江は担当の男の目を見返した。

担当看守の名は林亥乃助、年齢は六十一歳になる。色つばい目で玉江はこの老看守を見やつた。

「ええか。いまは戦時下の非常時や。規則をよう守つて模範囚になることがお前のつとめや。ええな」

動揺を隠すように、少し、居丈高に言い放つ。玉江は林看守に引き立てられ、独居房棟に収容された。

別棟になつていて、その戸外に通路があつた。

看守詰所の前を過ぎると、鉄柵の扉があり、ほの暗い闇がその奥にはあつた。監房の前に立つ。

玉江は林看守の手元を見ていた。

鍵を差し込む時、その手元が、ぶるぶると震えた。

中風の氣があるらしい。

「お前、ええ体してるな」

独居房に押し込められた時、林看守が背後から声を掛けてきた。玉江には舌なめずりをしている男の顔が想像できた。

「うち、男はんには好かれるほうや」

と、小首を傾げ、しなを作つて見せる。女の後れ毛が立っているのが、何とも色つばかつた。

林看守は遠慮のない目で、首のあたりから下半身までを舐めまわした。ちらと見た股間の黒い飾り毛のことが頭をかすめた。

拘置監三〇三号室。囚人呼称一二一番が尾形玉江の識別番号である。

「寒うなつたら言い、毛布持つてきてやるよつてにな。これで、わしは女子おなごには親切なほうや。く」

三畳一間ほどの独居房の中で、林看守はやに下がった声を出した。下唇の厚い、好色そうな顔であった。がちやつと弾機がはね、シリンダー錠がおりた。

完全に外の世界と隔絶されていた。尾形玉江の身柄は、細いコンクリート壁の細長い一室に収監された。

2

二月四日のこと。

昨夜の出来事の一部始終が、まだ生々しく玉江の脳裏には刻まれていた。ほんとうなら、彼女が仕組んだ今度の事件は完全犯罪のはずだった。

それが：今は囚われの身、その不運を嘆かずにはいられない心境であった。欲と情痴のからんだ殺人事件、完全犯罪の歯車が少しく狂ったのだ。

席亭花隈はなぐまを舞台にした事件の主役として、玉江は絡んだ。すべて、計画犯罪であった。

花隈は十九年一月の建物の強制疎開令の適用は免れたが、三月に出された高級享樂の停止策によって、事実上、廢業に追い込まれた。

同じ水商売の芸者や待合の仲居なども、勤労挺身隊の一員に加えられていたが、この時勢、福原遊郭に鞍替えした女も多く居た。

軍需工場などで働いても、女の身分では、めしが食っていけなくなっていた。福原遊郭は繁華街新開地と、海側の一部に造船工場を控えていた事で、戦時中でも繁盛していたのだ。

およそ、九十数件の妓楼と千四百人余の遊女、福原は繁華街の新開地と、南側に、造船工場を控えていたことで、戦時中でも賑わいを見せていた。

十数軒の妓楼と千四百人余の遊女、一夜の契りを終えて、戦地に向かう兵士で、福原は溢れ返っていた。

席亭花隈はこの恩恵にはあずかれなかった。

酒色をもてなす料亭は軍の高官や景氣のいい軍需

工場のお偉方で一時は賑わったが、戦況が不利になるにつれて、『ぜくたくは敵』となり、商売が成り立たなくなった。その矢先の高級享楽禁止の通達であった。

花隈の主人、菅家吉蔵を殺すことを決意したのは昨年の年の暮れのことである。

玉江は内縁の妻という立場にあった。五十二歳の男と二十五歳の女、世間から見れば色仕掛けで資産家の男にとり入っている女、そんな風評も、とかく、街では聞かれた。

花房栄一をこの計画に誘い入れたのは、昨年の暮れ頃のことであった。

すでに、東京、名古屋などの大都会に敵機が来襲し、焼夷弾の雨を降らせていた。偵察のために、数度、米軍爆撃機が神戸にも飛来していた。

こんな世情の中、花房栄一と玉江は、防空演習のさなかに出会った。

戦時中、町内会組織の一つとして隣保制が敷かれた。向う二軒両隣り、およそ十数戸単位が一つとなり上意下達の機能を果たした。彼は防空演習の指揮者として、この演習に加わっていた。

白い軍手の義手が玉江には印象的であった。中支戦線で負傷、日本に戻されて二年ほどになる。

その間に警防人の一員に任命された。激戦の最前線では用なしの戦士だったが、男手の少ない銃後では、戦士の資格者足りえた。齢もまだ三十を出たばかり、彼は壮年者の一人でもあった。

防空演習の対象にされたのは、菅家吉蔵の持家の一つであった。家屋疎開令で、間もなく、取り壊されることになっていたので、人為的に火を放たれた。

実戦さながらの、演習指揮官に命じられた花房は、どこか嬉々としていた。

「勢いよう燃え上るさかいにな。手際ようやらなあかんで。バケツリレーに休みはなしや。ええな」

玉江には、花房のこころの動きは読めた。

吉蔵と花房はあまり仲がよくない。花房が吉蔵に金を借りていたこともあるが、自分が世話をした小女に吉蔵が手を出し一騒動あつたあとなので余計に憎しみの情をもやしていたのである。吉蔵の持家が無用のものになり、火を付けて燃やされるのを見るのは、氣持のいいことにはちがひなかつた。

金貸しの悪業に成敗を加える気分にもなれた。火が放たれ、めらめらと白い炎が建物の外板を舐めた始めた時、玉江も氣持ちが高まつた。

ふと、その時、炎の中で焼け殺される菅家吉蔵のことを玉江は頭の中に思い描いた。

救護班に回された玉江は、バケツリレーの列には加わつていなかった。指揮官の花房のそばにいた。

「この中で焼け死んだら黒焦げやわ。ああ、こわー、ねえ、人殺してカンタンやね」

玉江は無邪気なことを口走つた。

「なんやて？ あんた、ぶつそつなことを言うんやね」

まじまじと、花房は玉江の顔を見た。

「そやかて、空襲になれば、もう何がなんやか、わかんようになるわ。この世の中には悪い人間、一杯おるもん」

「そらあ、あいつ殺したろ、思つてるのは、誰れにもあることやろけど…」

妙な会話になつた。あらためて玉江は花房の顔を見返した。互いに、戦時下としては、不謹慎なもの言いであつた。

男が応じて来たので玉江は意外な感じがしたのである。玉江はこの時、花房に大いに興味を持った。

頭の中にある怖ろしい計画の実行者として、この男を引き入れることを玉江は考えていたのだ。

「うちは火を見るとな、なんや男はんが欲しいなるう」

「なんや？ なんやて？」

男の背に語りかけたが周囲の人の声に半分掻き消された。建物にはすでに半分ほど火が回つていた。

やつとバケツリレーの行動開始となる。女たちの勇まし

い掛声も始めのうちだけで、やがて声が小さくなった。それでも、効果はあったとみえ、燃え募っていた。

火はちろちろ火になった。

一時間ほどで防空演習は終った。帰る方角が同じだったので、玉江と花房は肩を並べて歩いた。

「あのな…今度うちとあんた、密会せえへんか」

囁き声だったので、よくは聞こえなかったのか、

「なんやて？」

と、また花房が聞き返した。

だいいち、密会とは聞きなれぬ言葉であった。

甘ったれた声を出す。「このわしとか…」からかわれたと思ったのか、男は怒ったような口調になった。

「うちの体、どの男も欲しがるわあ」

やはり語尾が鼻にかかっていた。

「欲しがる言つてもな…」

男は煮え切らない。話半分で聞いてもいた。

「ふふ、あんたも欲しがりません勝つまでは」の口やのん。そんなんほんま、しょうもないことやのに」

まるで戦争のことなど興味ないといったしやべり方であった。咎める気持があれば花房は注意できたはずだった。が、何も言わなかった。

この日は玉江は誘いのことばだけにした。

この男を手玉にとる自信が玉江には沸いてきた。

3

一回目の密会は、それから一ヶ月後、立ち退き予定の空き家の中で会った。

人目につかぬよう夜を選んだ。

誰れがそんな噂をまいたのか、傷療軍人であるのに陰では花房は意気地なしの男のように言われていた。

死ぬのがこわさに自分で指を傷つけ、破傷風を呼び込んだというのがその噂の中味であった。

破傷風というのは傷口から破傷風菌が入り発病す

る。土中や汚物などに菌が含まれていることが多く、昔は命とりになるケースも多々あつたといへん怖れられた。毒素は血行や末梢神経軸索を辿り脊髓や、脳にまで達することがあるので、重症の場合は手や足など患部を切断することがあつた。

最前線では、赤錆びた五寸釘で傷をつけ、ドロを何度か傷口に塗りつけておくと、罹患すると信じられていた。二回、三回と続けるうちに、破傷風菌が本当に入れば、リンパ腺が腫れ、高熱を出す。

もつとも、手当てが遅れると、乱暴な外科手術を受けなければならなくなる。

どこか、花房には暗い翳りがあつたので、こんな噂を立てられるようになったのかも知れない。

それに貧相で、無口なのも災いしていた。

出身は兵庫県北部の豊岡で元は蒲柳（ほうりゅう）細工の職人をしていた。

柳の枝で行李や籠などを編む仕事である。

それで彼の足はいがり股に変形されていた。

柳細工を編む時、両脚の間に籠などを抱えとるので自然と、両足がカエルのように内側に曲がつてしまうのである。いわゆる、湾脚のことで、小学校を出てからの奉公だから、一人前でない骨格が、いがり股に変形されてしまうのだ。

外形の悪さと、性来の暗い性格、それにどこことなく戦争の時勢に染まぬ女々しさなども持ち合わせていて、この男は損をしていたのだつた。

出征中に妻を肺病で亡くし、傷痍軍人として、暮らすようになって以来、ずっと彼は独りでいた。義手を他人に見られるのが嫌で彼は女も避けて来た。

また、からかい半分ではないかといった思いが半分はあつて、この男は本気にはなれなかった。

そのくせ、期待感に胸は高鳴っていた。

それでも、ごとりと音がし、裏の勝手口の扉がすーと開いた時も、玉江以外の誰れかではないかと身構え

たりした。

月明りりの青さが玉江の豊かた肉のかたちを露わにしてくれた。思わず、花房は生唾をのんだ。

「なあ、おるん？」

「ああ、こゝや、こゝや」

上ずった声が空家の奥でした。畳のない板床の上で、彼はズボンの下の固くなったものを上から握り締めた。

「なあ、うちの噂きいてるん」

脂粉の匂いを彼は嗅ぎ分けた。

間を外すようなのんびりした訊き方であつた。体を硬くしている男はすぐには答えられず黙っていた。

「あのな。うちのあそこはな。作り具合が他の人のんとは、違うのや。男はんはな、みんな、うちの体の上で、よがつて呻き声をあげるんや」

「なんのことや、それは…」

「ふふ、口では言へんわ」

「そやけどおまえ、ちよつとした色情狂やな。ええ女やけどな」

その気のあるところを、玉江が見せつけたので、安心したのか、彼は少し気安さをみせた。

「戦争中やのに、こればかりはな。わしもええ思いがしとうなつたわ」

「あのな、うちには、戦争なんて関係あらへんわ。鉄砲かついで戦地に行けるわけやないしな。そやろ、うちはしたいことしただけなんや」

「ほな、わしらもやろっ」

花房は時間が惜しいのか、性急なことを口にした。

「まあ、その代り、うちの言うこと、なんでもきいてくれるか」

「ああ、抱かせてくれるんやつたらな」

そのことばを待っていた玉江は、声をひそめ、自分のさつ殺人計画のことを少しだけしゃべった。

「あのな。一緒に住んでるだけのことや。何もかもあかん男なん。はよ、別れたいんやけど、あの人につくしてるのに籍に

も入れてくれんし、財産かて、ちよとだけしかくれへん。ほんまはジブチンの爺さんや。ひどい男やとあんたも思わへん？うち、あんたとやったらうまいこと世帯やつてける気がするんや」

暗に、結婚まで考えているとほめかした。

防空演習の日から、二度ほど顔を合わせた。

街中のことだったので一言、二言ことばを掛け合っただけだった。それで、男の気を誘うために、

「男はんの数が足りんもんな。銃後の女はみんな可哀想や。なあ、あんたも男はん一人で淋しくないのんか」などと、甘ったれた声を花房の耳元に吹き込んだ。

小男で、一メートル五十そこそこの貧相な体付きの男には玉江は得難い女のように思えた。

女で一メートル六十近い体躯だと、当時としては大柄の女であった。

なにより、乳房の大きさと腰の張り、それに玉江は男好きのする派手な顔つきの美人であった。

花房は義手だからどうせ正業にはつけない。それで、菅家吉蔵の財産を奪う話に関心を持った。

玉江の殺人計画は周到なものだったので、その点でも、一緒に行動を起す気になった。

「よしや。まかせておけて、わしかて戦地でタマの下をかいぐつてきた男やで。それにな、わしにもあいつを殺す理由はありや。あの豊岡から連れて来た女はわしの親類筋の女で面目丸潰れや。十六のおなごの初もんをあいづれずくで奪いよった」

「あの時は家を留守にしていたさかいにな。ほんま、ええ年してるのにあつちの方だけは達者なんやから」

半年ほど前に起きた話を玉江が口にした。

「ま、そんな話はもうどうでもええわ。えらい具合いがえて、そらあ、どういふことなんや。あんた、初めからわしにえらい氣い持たせるよつてにな。そのこと、毎晩考えてたんや」

闇の中だったが、ほの白さに形どられた玉江の肉のか

たちが見えるような気がした。

しかもふつふつと話す度に息声が洩れて出た。

女の匂いも嗅ぎ取っていた。

「あのな、知ってるか、うちのは『つるしぼ』言つてな、あそこんとこが、つるし柿並べたみたいにぎざぎざになつてな。ごつつう、男はんには具合いがええんやと」

「……」

花房が生唾をごくりと呑み込む音がした。

「わかつたさかい、こつち来い」声も上ずっていた。

玉江を引き寄せようと義手ではない左手を差し出した。その手をそつと握り、子供をあやすように男の側に押し返す。

「うち、今日はあかんのや。その代り、うちがしたげるわ」

「あかんて、なにがや」

「あのな、月のもんでうちの体汚れてるのや」

「……そんな」

玉江はちゃんと頭の中で計算していた。

抱かせてしまうと男はいい気になるもの、焦らせてやれば、男なんて女の言いなりになると、玉江は不遜なことを考えていた。玉江は数多い男経験のなかで、ちゃんと男の操縦法を学んでいたのだ。

結局、玉江は男の下半身をまさぐり、指で巧みにしごいた。使える左手で、モンペの上衣の胸元に手を入れてきたがぎごちなかった。

義手の血の通わぬ手が玉江の背にかかったが、異物の感じに玉江は嫌な思いを持った。

月明りが忍んでいたが、暗闇に近い。

動物的な声を出し、男はおのれの欲望を噴き出させた。玉江が手を使い、花房の一物をしごいてやった。そうやって、ひとまずの男の気持ち静めてやった。

「ええ、今度はうちの体ちゃんと抱いてな。うち、もう、あんたが好きになつてゐるんやから」

花房栄一は晴れ晴れとした気になった。

本気で、菅家吉蔵を殺すことを考えた。

菅家吉蔵は女あそびにかけては知られた男であつた。席亭“花隈”は色街の外れにあり、戦前は芸者置屋もしていた。

二十すぎで身代を任せられたので放蕩の限りをつくした。女の体のことなら大抵は知っている。

その吉蔵が、玉江の体に惚れた。

「わいは、手あたり次第、ほんまに、たんとや。女のお相手をしたけど、おまえの持ちもんは特別やで。滅多にはお目に掛かれん。づるしぼぼ。てやつやないかと、はじめからな。わいはそう思うてた。ふくら下ぶくれのお多福面に柿の種並べたみたいな小さな歯、ええ歯並びしてる。それだけやない。ほれ耳たぶのここんところがな…」

吉蔵は玉江の耳の穴に舌を差し入れてきた。その舌先が耳たぶを丹念に舐め、耳の穴の下辺をなぞった。

「へ、玉江のは絶品や、この耳の穴のほれ、ここんところが、すばまってるやろ。ここんとろとあそこの道はな。仲よし小道というて、せまいほど男にはええ具合いなや。玉江の持ちもんは入口がせまくなってるさかいに、絶品中の絶品ちゆうことや」

好色な男の口ぶりに乗せられて、すっかり、玉江はその気になった。花房栄一の前でリつるしぼりなどという、卑俗なことを口にしたのも、この吉蔵の知ったかぶりの解説のせいだった。

「ほれ、指を入れてみい」

その時、玉江は命ぜられるままに自分の指を口辺のあたりに忍ばせた。たしかに、襷(ひだ)の部分に複雑な皺が刻まれていた。つるし柿を並べたような…吉蔵が教えてくれた通りの構造を、そこに探り当てた。

玉江は花隈の仲居として、当初は住みついた。

そのうち姐御気取りで、お座敷の差配をするようになった。この時はもう芸者を置いていなかったが、芸者を呼ぶ

のも、帳場の仕切りも玉江がいつのまにかてきぱきとやつてのけていた。

ここへ来る前にやはり料亭で仲居をやつた。

その時も玉江は女将面したことがあつた。吉蔵の女房のぎんが病氣持ちで伏せていることが多かつたので、玉江にお鉢が回つてきたという事情もあつたが、なにより、玉江は肉体の魔力で吉蔵を手玉にとつた。

元々、道楽一方の吉蔵には水商売を切り盛りして行く能力はなかつた。

戦争が始まつて一年目、まだ民間の商いも工場などもそれなりの活力を持っていた。軍需工場の主や、商家の旦那衆に“花隈”は結構ひいきにされた。

それというのも、主江の色香に魅せられた男たちが多かつたからである。女将になり変つていたのも名差しの客が数多くあつたからだ。

せいぜい、吉蔵のやれることは、玉江が特殊構造の持主だと吹聴して回るくらいだつた。

女遊びに慣れた吉蔵は、玉江が旦那衆相手に体を提供するのを見て見ぬふりをしていた。金に結びつけて、玉江を一面では利用していたのであつた。

けちんぼうではないところが、この男のたつた一つの利点だと言えた。楠町に家作が四軒、それに神有電鉄湊川駅から十五分ほど山中に入つた山田村の鈴蘭台に旅館があつた。旅館のほうは小料理屋も兼ねていて、そちらは人に任せていた。

いつか、玉江は吉蔵の資産を自分のものにしたといふ思いを持つようになつた。家作だけでなく、かなりの金を吉蔵は貯め込んでいるはずだつた。

吉蔵とぎんの間には子供がなく、弟が一人あつたがすでに死んでいたので吉蔵には身寄りがなかつた。

戸籍上の妻になれば、そのまま、すんなり財産は玉江のものになるのだつた。

花隈の仲居になつたのが三年前、住みついて三日にはもう吉蔵と男の女の仲になつた。この時は行為前に金を

手渡された。抱く度にいくらかの金を玉江はもらつたが、いつの間にか、金で買われる女ではなくなつた。

その代り、女将顔をして帳場に座つた。

自分でせつせと小金をくすね貯め込んだ。

ぎんは起きたり寝たりの毎日だったが、口の方だけは達者だつた。初めは玉江に指図していたが、心臓病がすすみ、前ほどは大きな声を出さなくなつた。

芸者上りのぎんは医者から房事は禁じられていたの
で、玉江と吉蔵の仲を見て見ぬふりをしていた。

ぎんが死んだのは一年余ほど前の夏のことである。

ぎんが死ぬ二か月ほど前に妙なことが起きた。

朝炊きのめしにうつすらとはあつたが黄色がまじつた。
。ラングーン米などの外米が配給されていた頃なので、吉蔵もぎんもこの米のせいだと思つたが、気味が悪いので口にせずには捨てた。

あとになつて気付いたことだつたが、この変事も玉江がやつたことではないかと吉蔵は思つた。

その日の朝、腹痛を訴え、玉江は自室に寵つていたのだ。
。実はこの時のことは玉江が仕掛けたことだつた。

殺すのが目的ではなく反応を見るために、朝炊きのめしの中に異物を混入した。毒ぜりといわれるおおぜりの地下茎を乾燥し粉末にして前から所持していた。

玉江は日高の山中で養父と暮らしていた時に、この毒ぜりのことを教つた。おおぜりは水沼や池のほとりなどの湿地帯に多く、自生するせりで、夏はたんぽぽに似た白い花を咲かせる。シクトキシンという毒が緑色の地下茎には含まれており、毒性が強いので極く微量で死に至る。

いやがらせのつもりでその時はほんの微量を用いた。

ぎんに対しては吉蔵もその死を願つてゐるふしがあつた。

『ぼつり逝ってくれたらええのにな。ほんまに』

吉蔵は陰ではそんなことを、時たまに、玉江の耳に吹き込んだ。

『ほんなら、うちをかみさんにしてくれるんか』

「まあ、考えんわけではないけどな」

仮りの話だから少し玉江の気を惹くようなことを口にした。ぎんを殺す機会をずっと、玉江は窺っていた。

知人にすすめられてぎんは煎じ薬を常用するようになった。ホオズキ、ジャコウ、ゴオウに高麗ニンジンなどを土瓶で煎じ、ぎんは薬液を自分で作った。

煎じ薬の中に少量の毒物を混入した。

食事の一時間前にぎんは煎じ薬を服用した。

しばらくして苦しみ出し、黄色い液を吐き出して死んだ。死因は急性心不全として処理された。

科学捜査の行き届いていない時代のこと、ぎんの持病の心臓発作と警察は断を下したのだった。

吉蔵は、玉江の仕業ではないかと疑ったが、警察では一切口にしなかった。

これまでにぎんを邪魔者にしてきたし、玉江と同衾中には死を願うようなことを何度も口にしてきた。下手をすると自分だつて疑われかねない。それで黙っていた。内心、ぎんが死んだことでほっとしていた。

厄介者が一人なくなったのだった。

ただ、その時、玉江という女に底知れぬ恐ろしさの情を抱いた。籍を入れてやると口約束したものの、吉蔵はなかなか実行には移さなかった。

財産を狙われているのなら、同じ手で玉江に殺されるのではないかと半ば本気で考えた。それで、一時のがれの気持もあつて、楠町にあつた家作四軒のうちの二軒を、玉江の名義にしてやった。もう、財産価値がないことを吉蔵は知っていた。建物の強制立退き令はすでに大都市では実施に移されていて、早晚、取り壊されると踏んだ。

あいにく、玉江に譲った二軒の家作は間引きをまぬがれ、吉蔵名義の二軒の家作だけが、取り壊された。

だが、彼はどちちでも同じことだと考えていた。

空襲を恐れ、郡部への疎開が続いていた。

玉江に譲った家作も、不動産価値はこの時代のこと、なに等しかった。たまたま吉蔵は、昭和十七年の四月に

兵庫区大開通りで空襲に遭遇した。

米空母ホーネットから発進したB25が、東京、名古屋、神戸などにこの時、本土初空襲を加えた。

十二機が東京方面、二機が名古屋へ、そして編隊から離脱した一機だけが、ひやかし半分に神戸に飛来して、爆弾と焼夷弾を投下して過ぎた。

真昼間のことで、友軍機かと思つて空を見上げたら、いきなり、ニキロの油脂焼夷弾が降つてきて、あたり一面が火の海になった。この時の被害は軽微だったが、それでも神戸では死者が一人出た。木造家屋など、焼夷弾が落ちてきたら、ひとたまりもないと思つた。

この時の教訓を生かし、市街地にあつた旅館を売り払い、代りに絶好の疎開地になる山間の地の鈴蘭台に料理旅館を買い求めた。

ところで、玉江は、世間のことに疎いところがあつたので、吉蔵のこんな迷惑のことなど露知らなかつた。

戦争はますます激しさの度を加えていたが、女の身にはそれほど深刻には映らなかつた。

わずかばかりの小金を貯めていたが、できることなら、行く行くは男相手の商売で一儲けしたいと企んでいたから、金と“花隈”の家屋敷が欲しかつた。

女の体を元手に生きてきた女である。それで吉蔵に取り入つた。それに、遊郭の福原や、芸者置屋などの多い花隈・大開通り、橘町などに多くの知己がいた。

この地の利と顔を生かせば、自分一人でも充分にやつていけると玉江は踏んでいたのだった。

ただ、この商売が時局柄、戦争不況に巻き込まれて先行きが怪しくなるとは気付いていなかった。

世情に疎い女の悲しさであつた。

建物の強制疎開令で二束三文の値になつてしまうことを吉蔵も口にしたが、玉江は意に介さなかつた。

空襲の怖ろしさのことも頭になく、ただ漫然と、その日その日を過ごしていたのだった。

「あはやな。いまは金で持つとるのがいちばんや。胴巻きに

札束巻いてな、どこでもわしは逃げたるぞ」

それが吉蔵の口癖だった。

席亭の客の一人にたまたま智恵をつけられたこともあつて、玉江は自分がもらつた家作を手離さずにいた。土地や建物は安いうちに手に入れたほうがいいと男は言つた。

もちろんこの男は日本の勝利を確信していたのであつた。自分の家を持つたことのない玉江にとっては、どんなボロ家でも家は家であつた。それで吉蔵の金に代えたほうがいいという意見を無視した。

眼の前に焼夷弾が落ちて来なければ、玉江には吉蔵の忠告は聞けないのだつた。

玉江は一人だけ、戦争とは無縁の場所にいた。

物資の不足や日常の慌ただしさ、出征して行く兵士たち、戦争の状況はあつたが、彼女の視野の中では、それらの事象はゆつくりとした動きしか示していなかつたのである。刑法だけは戦時下の元、厳しくなつていた。

戦時刑事特別法は昭和十七年二月二十四日に法第六十四号として公布され、同年三月二十一日施行となつた全文三十一条より成る。

戦時下の秩序をまもるために一段と罪科が重くなつた。嚴罰主義がこの法律の精神となつている。

尾形玉江の犯罪は明らかに、戦争に反逆する重大犯罪であつた。

一片の情報すら当時の新聞には記されていないが、戦争状況下を利用して計画的に実行された点で、犯罪史上まれにみる特異なケースだといえる。

二度目の密会の時は室内だと前回の約束を果さなければならぬので、花隈の庭園の隅にある楠の大樹の下で会つた。夜のことであつた。

「こんなところで立話でもないやろ。どこか空家にでも、

もぐり込もか」

「せつかちやな。うちはこうして、あんたと会っただけでもええのに」

「なに言ってるのや。誘いを掛けたんはお前の方やで」
「わかつてるう。あんたに色気違いみたいに言われたけどうちはほんまに相手の人が好きになるまでは体を許すの嫌なんや。心も好きにならんと最高にはなれんものね」

「わしはもう好きになってるぞ」

「嬉しいわ。今度会った時にええ思いしよ。それまで我慢してくれるか？」

「いやあないな、そやけど、男と女のことばみんなやつてる」とやで。わしらこの前呼ばれて、風紀肅正の訓示を受けたとこや。ほら、警防団長の門馬良平、あの爺さんがしゃつとこばつて演説しよった。この頃は、住居侵入罪で捕まる男が増えてるて話や。あのな。タネを明かせば、強姦・姦通事件や。あれはな、銃後の妻が犯されたら夫の告訴がなけな事件にでけへんや。そやからな、住居侵入罪で裁いてるわけや。銃後の守りいうても男と女のことばどもならん。なんしろ、百八十万人の銃後の妻が男なしに夜を過ごしとるわけやから、まあ、色恋沙汰も起きるわな」

「ほな、うちらの色恋沙汰、おおつぴらでいこか」

「そう言うことちやな」

花隈の庭園は冬枯れて、築土のつつじや、庭樹は裸になっていた。それでも築土の向うの小さな人工池には、滝に見たてた巖頭から水が流れ落ちていた。

もつとも二人にはそんな光景も水音も聞えてはいなかった。門馬良平のことは玉江も知っていた。以前に、花隈に玉江目当てでこの男は通つて来たこともある。

結局は吉蔵に多額の借金を負わされた。

銘の入った由緒ある日本刀が一振り、質草代りに吉蔵に預けられている。女の魔力に初老の男は引き寄せられたのだが、玉江がその気にならなかつたので思

いを果せなかつた。

「ええ、ほんまに、これからうちの言うこと、きいてくれたら、うちの体抱かせたげる。あんたのことは命がけや。そやからこんな相談もするんやで」

この時、玉江は殺人計画のことをしゃべつた。

しゃべつてから、真情を見せるつもりで口づけを許してやつた。花房はむりやり玉江の胸に手を押し入れようとしたが、その手を押しとどめた。

左手一本だけしか自由がきかないのでむりだつた。

冷たい手で乳房に触れられのも嫌だつた。

それで着衣の上から胸を触らせた。

「ええええ、ええ感じや……」

左手の指だけが、着衣の上から乳房を弄ぶ。

もう一度、花房が唇を寄せて来た時、つと、玉江は体を離れた。

「早(は)よ、家に帰らんとあの人うるさいのや」

「なんや、吉蔵のことか」

「これでも、うちら家の中では夫婦気取りなんや」

「なにぬかす。おまえ、爺さんと、このわしと、どっちが大事なんや」

「あはやな。やきもち妬いて、ええか、うちらがほんまに夫婦になるのには、あの業(ごう)つくばりが死んでくれんとどもならん」

また、花房の気持を揺さぶつた。充分に男に気をもたせた。燈火管制下のことで、二階建ての花隈の建物は黒いかたちだけを示していた。ひっそりしている。

この夜、吉蔵は家にいなかったが、玉江は花房を引き入れなかつた。

事が成就するまで、また、お預けを食わせた。

このころ、吉蔵は疎開でもしているつもりか、山間の鈴蘭台の家のほうに出かけていることが多かった。

その間に、玉江は勝手に市役所の戸籍係に行き、菅家吉蔵の妻として入籍した。

年老いた吏員は別に怪しみはしなかつた。

〈二月三十一日〉

吉蔵がこの日、“花隈”にもどつてくると電話してきたので、玉江はいよいよ犯行計画を実行に移すことにした。左手一本の花房に、吉蔵を襲わせた。

玉江が巧みに寝室に誘い、吉蔵に最後の愉しみを与えてやった。その時、予定通りに、花房は窓際の黒いカーテンの陰に身を潜ませた。

「おまえのな、こゝがたまらんのや」

脚を開かせ、吉蔵は股間に顔を埋めた。燈火管制中のことだから二十燭光の電灯が一つだけ灯されていた。窓をおおう黒いカーテンが吊るされている。

外に光が洩れ、敵機の目標にならないようにするための工夫だった。事前に、窓の手摺りの木枠に、ロープの片端が巻きつけてあった。

粹人ぶった吉蔵はドイツ製の電蓄をいつも行為の時にまわしておくのが趣味だった。秘蔵の西洋音楽盤、ワグナーの“ワルキューレ騎行”の曲が序奏を奏で始める。

やや勇壮な響きを持った組曲の一つである。

ドイツとはこれまで友好関係にあったから、レコード盤は廃棄処分されずに残っていたのである。

「ようになるとな、この指が痛うたるほど締めつけられる。たいていの男が音をあげるはずや」

吉蔵の右手の中指が、肉壁の壁（ひだ）を分けていた。じわじわと肉の穴がまとわりつく。玉江もその部分に力を込めた。黒いカーテンの陰からロープの端を握り締めた花房が飛び出す。素早く、吉蔵の背後に立つ。左手一本で充分であった。

花房がロープを吉蔵の首に回す。

不用意な前かがみの姿勢だったのがれる隙はなかった。「うーっ」一声発したがぴーんと張ったロープの反動で、吉蔵の体は半回転した。

ロープにはいくつもの結節が事前に作つてあった。

首に二重巻きにされたロープは首からは外れなかつ

た。花房は夢中で気付かなかったが、そのときの玉江の表情は異様であった。

全身を起し、首を締められ、いままさに、悶死しようとしている吉蔵にぎらついた眼を向けていた。

舌なめずりしているようにも見えた。

爪こそ立てなかったが、どこか、獲物を襲う態勢になっていた。首を前に突き出し、玉江は一点を凝視していた。吉蔵の下半身に玉江の視線は突き立っていた。

ちようど、眼のすぐ下に押し開かれた下半身があった。手足を吉蔵が突つ張った。瞬間、萎えていたはず、男のものが、わずかではあったが勃起した。

とたんに、白い液体がこぼれ落ちた。吉蔵は絶命する際に射精したのであった。勢いよくではない。

やつと先端部まで絞り出されたというふうの、のたりとした放ち方だった。それは精液というよりは、吐き捨てられた唾液の濡れを思わせた。

苦しそうにもがいたので体が移動し、吉蔵の体は、ロープを締め上げている花房のほうに引き寄せられた。ぽきつと嫌な音がした。

気道が閉鎖され、舌骨が折られていた。

花房は、吉蔵の体が動かないように、片足を吉蔵の腹にかけていた。完全に咽喉骨をロープの力が砕いていた。死んだのをたしかめた花房は、とたんに、へなへなとその場に腰を沈めた。ロープを手から離すと、口元から泡を吹き出した。

「抱いて、ええから抱いてえう」

たつたいま絶命した男の代りに、殺人者の男を手招いた。花房は逃げ腰になった。

自分が殺した男のそばで女の体が抱けるはずはなかった。それなのに、玉江は自分から着衣を脱ぎ捨て素っ裸になった。白眼をむき、口を開け、少しばかり舌先をのぞかせた男の苦悶の表情をちらと見やると、余計なこと欲情を募らせた。

豊かな乳房と、固い張りのある腰を、花房の眼の前

にさらし、にじり寄る。

「うちは興奮してるんや。どないしても、あんたをモノにするで。やつと、うちのもんや」

それまで、あれほど焦らせたくせに、この変り様は何とも異様であつた。花房も人を殺した恐ろしさを忘れようとしてズボンを引きおろした。

「はよし、あんたが欲しいねん。もう、うち、たまらんようなつてるウ」

いきなり、花房に挿入してくれとせがんだ。丸い肉の塊りが突き出された。が、股間をのぞき込んだら、黒く、猛々しい三角地帯が大きく開かれていた。もう、口辺のあたりは濡れているのか、光っているものが見えた。電灯の明りには黒いボール紙製の傘が掛けられていた。明りの届くのはその直下だけで、ちょうど玉江の秘所はその円形の明りの下で息付いていた。が、花房のそれは、まだ突起してはいなかった。彼は焦った。

「はよ入れて……うち最高の気分になつてるんよ」

なお、せがんだが到底むりだつた。

「なにしてん？うおはな、いま入れて欲しいんや」

声の調子は怒りを含んでいた。急に身を起した玉江が、邪慳に、花房の体を後ろに押し倒した。

強く押したので彼はあお向けに引っくり返つた。

その拍子に義手の右肩部分を畳に打ちつけ「うーん」と痛さに堪えかねて呻き声を洩らした。

左手で体重を支え右肩を庇つた。不意のことで、したたかに義手の接続部分を打ちつけていたのだが、そんなことにはお構いなく玉江は彼の股間に顔を埋めた。

花房にとつてなお悪いことに、彼のすぐ横には吉蔵の死体が転がっていた。

しかも、吉蔵の裸の下半身がこちらを向いている。

痛さに首をもたげるようにした時、見たくない吉蔵の半ば開かれた股間のあたりが見えた。

ぬめぬめした玉江の舌がおのれのものに這っていたが、それはどこか遠のいた感覚のものだつた。

充血状にはなつてこない。

「あんた、なにしてん？」

気が狂つたみたいに、玉江は、ぐにやぐにやしたものを口中に含み慰撫する。それでもだめだとわかると指で強くしごいた。やはり力を示さなかつた。今度は男の体の上にかぶさり、開口部を押しつけた。

「ふわっ、ふわ、ふわっ」

玉江の息声ばかりが発せられる。どうしても結合を果したいという切実な思いが、体の下の花房にも伝わってきた。だが、彼のそれは何の反応も示さなかつた。どうして死んだ男の前で異常興奮するのか、彼にはわからなかつた。これは…玉江だけが知っていることだつた。玉江の過去の男の影が、この時、急に彼女の脳裏に呼び醒まされたのだ。体に染み込んだ性体験の一が玉江に異常さの火を付けたのである。

とうとう、この夜は目的を達することが出来なかつた。花房は、男の力を示すことが適わなかつた。

玉江の気持ちばかりが、この夜は昂じた。

このときのことでは気分を害したのか、

「そんな気になれへんのよ」

と、翌日も、その次の日も、玉江は人が変つたように花房の申し出を断つた。

抱かせる約束を無視し続けた。始末を言うなら、花房栄一は、このままに、玉江を抱かずに終るようになるのであつた。

戦時刑事特別法によれば場敵機の襲来がなくとも燈火管制下の犯罪は戦時下犯罪とみなされた。

第一条には、

戦時二際シ燈火管制中又ハ敵襲ノ危険其ノ他人心ニ動揺ヲ生ゼシム状態アル場合ニ於テ云々。の一節がある。

当時の新聞を繰れば、重罰主義に対する考え方を
知ることができる。

検事局発表の記事として空襲下の犯罪は厳罰
社会道義の確立に乗り出すとある。

その例に挙げられている事件の判決に眼を通して
みると刑の加重傾向がはつきりとみられる。

洋服三着、自転車のチェーンを盗み出した男に懲役
三年の判決。初犯なら通常十か月程度のこれは窃
盗犯、情状によつては執行猶予処分となる

また、不動産売買にからむ詐欺事件では、九千円
余りを詐取した罪で戦時刑事特別法を適用され
懲役五年の判決。組織犯罪としては配給制の清酒
を二年にわたり、五百八十五本横流し、かつ、幽霊
受配人口を作つて糸二百俵を詐取していた農業組合
の幹部が摘発され、懲役三年の実刑判決を受けてい
る。

地元の神戸新聞にも同様の記事が出ている。

鶏三羽盗んで懲役八ヶ月

戦争をよそに私服を肥やすことや、闇から闇の暗
躍をつづける徒輩、敵機の爆弾が地上に炸裂する日
まで、米英思想がぬぐひ取れさうにもない人間がま
だある。戦ふ生活戦列を乱すこれら悪質の闇や犯
罪に対する戦時裁判は官民たるを問はず峻厳に執
行され、戦列落伍者の覚醒をうながしてゐるが、最
近、神戸地方裁判所検事局において取扱はれた戦
時犯罪の中からその実例をひらふ。

▼神戸林田区中庄通一の町内会配給部長をとめ
てゐた某三五は同町内会配給の家庭用酒、ビールの
配給券をごまかし酒一斗五升とビール三十本を横
流した。町内会制度の職権を悪用する憎むべき行為
として懲役一年の判決が下った。

▼神戸須磨区小寺町の沖仲仕某五四は隣保で
飼つてゐる鶏三羽を盗み懲役八ヶ月の実刑判決を

受けた。また自転車一台で懲役一年を受けたものなどもあり、とにかく時局認識のない戦列落伍者に対する法の峻厳はいよいよ戦局苛烈と並行してますますきびしいものにならう。

尾形玉江と花房栄一の犯罪は戦時空襲下を利して証拠隠滅を図ったことにより重罪であつた。

燈火管制下の暗闇の中での犯罪だから明らかに戦時特別犯となる。強盗傷害犯でも死刑判決の法文が戦時刑事特別法には示されている。

二月四日、午後七時二十二分

近畿軍管区発表の空襲警報が発令された。神戸市兵庫区上橘通一带にB29投下の焼夷弾がばらまかれたのは六分後である。はじめ、螢火を思わせる照明弾が折りからの風にのり、ひらひらと空から降ってきた。青白い夜光に街が浮き上つた。

しゅーっと空を掃くような音がし、続いて親子焼夷弾が空中で炸裂した。幾筋もの光の軌跡が暗い空を切る。そのときすでに、花房は狭い小路を花隈に向かうべく駆けていた。

玉江は庭先にある防空壕に身を潜ませ、花房が来るのを待っていた。

母屋と離れた一角に物置小屋があつた。三間四方はある。元は古い家具や、什器類などがおさめてあつた。何段かの棚なども作つてあつて、かつては漆塗りの什器などがきちんと整理されて並べてあつた。

いまは値打ちのものは馬車を雇つて鈴蘭台の三州屋（みしま旅館）に運び込んでしまったので、中はがらんとしていた。代つて備蓄食糧や、消火活動用の雑具がおかれていた。物置小屋といつても五寸角の棟木で組まれた造りの粗末なものであつた。

それで消防格納庫の代りにされた。菅家吉蔵の絞殺死体は天井裏の羽目板を外して、すでに四日も隠されていた。

空襲がこのところ連日あったので急に避難する人々が増えた。前々から鈴蘭台の持家によく出かけていたので、吉蔵の姿を見なくとも、誰れも不審の気持は持たなかった。

横に細長い神戸の街は、裏山を一つ越せば秘境めいた山中に入り込むことが出来る。屏風岩のような六甲連山がそこに安全地帯を作ってくれるのだ。

鈴蘭台の三州屋旅館には番頭とその家族が住んでいた。客がないので旅館業の方は一時休業している。

楽隠居しているような初老の男に近頃は関心を向ける人も少なかった。

席亭花隈の西隣りは二階建ての民家であった。

三弦の師匠で、つい一年ほど前までは三味線の音色が絶えなかった。芸者衆が習いごとにくるので、いつもはなやかな雰囲気包まれてもいた。

だが、すでに第二次の建物疎開強制撤去令を受けていたので間もなく取り壊される予定になっている。

いまは誰れも住んではいなかった。最初の火災は通り一つ距てた真向いの酒屋がやられた。何軒かの商店が並んでいる一角である。ぱーっと火の手が上り、夜空にかがり火が上った。パチパチと火が爆ぜた。

赤い炎ではなく、橙黄色の燐火であった。油脂焼夷弾は、はしけ散ると一気に火を噴き上げる。

火の回りが早い。

続いて、あちこちで燐火の炎が天空を焼き始めた。

すで、花隈の消防格納庫からは手押しの旧式ポンプとバケツや、火叩き用の布製モップの“はたき様”のものが運び出されていた。

火の方向にむけて男たちが走った。

が、一人だけ、花房は流れに逆らって走った。小さな路地をすり抜ける時、消火に向う人と肩との肩がぶつかった。それで彼は左手で、義手の右腕をかばいながらその人込みの中を走り抜けた。

すでにホースの水が放射され、赤味を帯びた空に立ち

向かつていた。その水の膜の下をはいくぐる。まともにホースの水をかぶつたりもした。

彼が“花隈”に駆けつけた時、数メートル先の築土の上に焼夷弾の六角筒の火矢が一本落下してきた。

ぶすつと音をたて土中にのめり込んだ。まるで仕掛けの花火であつた。派手に火を噴き出す。

その時、彼の考えたことは、これが、吉蔵の死体を隠した物置小屋に落ちていくれたらということだつた。

同時に犯行計画に自信も持った。

あたり一面が火の海になり、なにもかも灰塵かいじんに帰すにちがいないと思つた。

玉江も同じことを考えていた。

吉蔵を始末したあと、玉江はこの家から八千円余りの現金を収奪していた。吉蔵は物置小屋の地下倉庫の石室に細工をし、その土穴に金と若干の貴金属類を隠していた。

前々から素知らぬ顔で玉江は守銭奴の男の行状を観察していた。多勢いた奉公人に暇を出し、一つ屋根の下で夫婦のように暮らしていたのだから、吉蔵の金の隠し場所ぐらいはすぐわかつた。

この場合は収奪したというより、そのまま自分のものにしたというほうが当っている。

「はよし。もうこの家かてやられるわ」

花房が物置小屋の前に立つた時、玉江がその背後に立つた。六角筒の不発焼夷弾が二本用意されていた。数度にわたる空襲を利用して花房が入手しておいたもだつた。すでに信管部分は外してある。

あとはガソリンに点火するようなものだつた。

「うちはこんなとこにいたら危ないよつてにな」

共犯者になることを怖れてか、玉江は勝手なことを言い、その場を離れた。しゆるつしゆるつ……。火の矢がなおも降ってきて、隣家の屋根を貫いた。

二本、三本、同時に落ちてきた。

瞬時に火の手が上り、隣家の建物の内部が急に明

るくなった。花房は胸のポケットからマッチ箱を取り出す。代用マッチで松葉が軸になっている。マッチの軸は松葉を乾燥し、硬度加工して用いられていた。一本擦った。

が、ここへ来る途中で何度も消火ホースの水を浴びたので花房の全身はびしょ濡れになっていた。

マッチの軸頭が湿っていて、擦ったらぼろりと軸頭が落ちた。二本目ももうい感じで潰れた。

彼は首を上げ、夜空を仰いだ。

無数の火の矢が、無気味な音を立てていた。

雨が降ってくるようなざわめきの音である。この物置小屋に火を付けずとも、いずれ、焼夷弾頭がここにも突き立つと思われた。

庭先の二十メートルほど先の大きな楠の樹にも、ぱりぱりと生木を裂く音とともに一発落ちた。

落ちてきた焼夷弾を手で捨て捨てたなどという武勇伝もあるぐらいだったから、近くに落ちれば物置小屋に投げ込もうとその時彼は思った。

焼夷弾は次に、“花隈”の二階の屋根を直撃していた。ナパーム式のものだから、家の中に落下すると、ぱーっと引火物が散って、またたく間に火に包まれる。

花隈の家屋敷も急に内部から明るくなった。半分逃げ腰だったが、なおも、花房は物置小屋に火を点けるべくマッチを擦った。

マッチ箱を右腕の脇にはさみ込み、自由になる左手でマッチを何度も擦ったが火は付かない。

軸頭を冷えた指であたためる。やっと火が付いた。

が、十二月の風は非情だった。足元から舞うように風が立ち、火はふっと吹き消された。

「あかん、あかんわ、こりや…」

彼は焦った。

あとは、この小屋に焼夷弾が落ちるのを待つか、火災現場から火種になる木片を拾ってきて火を付けるしかない。だがそれでは彼自身の命が危なくなる。

焼夷弾の雨の中に身を翻すことは危険だった。

花隈の屋敷はすでに壮大な火を上げ始めていた。

隣家の火の明りで、もうあたりは、赤くあぶり出されていた。六角筒の頭の部分からは少量だったが揮発性の液体が流れ出ていた。

火さえ付けば引火はかんたんなのだが、肝腎のマッチに火が付かなかった。もう一度、彼は火を付けることに挑戦した。火種を用意するために口に煙草を一本くわえた。しゃがみ込み、マッチを擦る。やつと火が付いた。

口の煙草を火に近付ける。

と、その時、警防団長の門馬良平が一人、“花隈”に駆けつけてきた。もう、商店街から海側の街は火の海で、自身も山の手方向にのがれようと前を通りかかったのであった。火の粉が降ってきたので門馬良平は、“花隈”の庭園内池で着衣を濡らすことを考えた。

それで、庭園内に足を踏み込むと、挙動不審の男が物置小屋の前でしきりにマッチを擦っていたのだ。

どう見ても放火の状況だった。彼にはそう見えた。

走り寄った門馬良平は、「おい、きさまあつー!」と、いきなり一喝した。花房は不意のことですぐで飛び上った。

したたか、義手の部分を足で蹴られたので花房は後に引つくり返った、続いて軍靴の鋏の打たれた先端部で顎を蹴られた。門馬良平はわが眼を疑った。

てつきり利敵行為をする敵のスパイかと思った。

そのような噂も街には流れていた。不逞の輩とて、戦争時下、存在していたのも事実であった。

敵機の目標になるように各所に火を付けて歩いていると、飛躍したことではあったが、彼の思いは、頂点に達した。かーと頭に血が上った。無抵抗の男を思う様打ちのめした。花房栄一は氣を失っていた。

まだ火が点ぜられていない不発焼夷弾が二本、筒先を物置小屋に向けていた。

小細工したあとがあるから犯意は明らかだった。

もつとも門馬良平は少なからず混乱していた。花隈の屋敷も隣家の建物も、すでに、半ばは、焼け落ち紅蓮ぐ

れんの炎が火の柱を空に向けて打ちたてていた。

その時、何を考えたのか、彼は急に自分の使命を思い出した。見ると、格納庫の中には、明治の遺物を思わせる蠅筒式きょうとうしきの小さな手押しポンプが一台残されていた。

この日露戦争生き残りの明治生まれの退役軍人は自分が火災の現場から逃げようとしていたことを恥じた。ここは踏みとどまって火を消すべきなのだった。

死の状況におかれて、彼も一種の錯乱状態にあったが、門馬良平はたった一人の決死の消防夫役を演じた。火の渦巻く中で、必死に物置小屋の孤塁だけを死守した。

直撃弾は落ちなかったが、火の粉が飛び散り風に煽られて物置小屋にも火が付いた。卿筒式ポンプを持ち出したがまるで役に立たない。それで人工池に走りバケツで水を汲んで物置小屋の屋根に懸命にかけた。

孤軍奮闘のお陰で大火にならずに済んだ。門馬良平は大真面目にこれだけのことをやってのけた。

いつの間にか、花房栄一はその場から逃げ出していた。門馬良平の奮闘にもかかわらず物置小屋はそれでも半分ほど焼けた。

これ見よがしに、吉蔵の硬直した死体が、どたりと地上に投げ出された。その死体を見て、やっと門馬良平は正気に返った。皮肉な結果となった。

花隈は全焼したのに、この小屋だけがぽつんと一つ残された。吉蔵の怨念が通じたような奇怪な結末であった。翌日には犯人が取り押さえられた。

玉江と花房は首尾を見届けるために現場にやって来た。だが、物置小屋は焼けずに残っていた。

生き証人の門馬良平、細工をした不発焼夷弾、吉蔵の絞殺痕のある死体。もはや、のがれる術(すべ)はなかった。

吉蔵の内縁の妻である玉江の行方を警察は探している最中であつた。まわりが焼野原になったのだから当然、物

置小屋は燃えてしまったに違いないと玉江は思った。迂闊（うかつ）だったが犯行現場に舞い戻った。

最初は吉蔵の同居人としての事情聴取だったが、早々に花房が犯行の事実をしやべってしまったのがれようがなかった。

戦時特別犯として緊急逮捕された。

この頃、神戸検察庁は少年電工を連続婦女暴行魔として逮捕、その取調べに入っていた。

兵庫県武庫郡東鳴尾村の武庫川堤防附近で毎夜、婦人とみると尾行、燈火管制下の暗闇を利用して姦淫を遂げんとする者ありの通報があり、張込み中にくだんの少年電工を逮捕したのであった。

既遂四件、未遂三件、十八歳の電力会社につとめる少年が犯人であった。戦いの最中、性的犯罪が知れると国民の士気に影響するのでこの強姦事件も一般には知られることはなかった。

戦時下、挙国一致の体制は性的犯罪の減少を想起させるが、事実はまったく逆であった。

当時の性的犯罪の統計数字にも、この間の事情は如実に示されている。

大部分が強姦罪に類した犯罪である。

昭和十五年、一〇一八件

昭和十六年、一一五九件

昭和十七年、一五八九件

昭和十八年、一六二四件

昭和十九年、一三一八件

昭和二十年、六一一件。

戦いたけなわの昭和十七、十八、十九年の三年間に特に件数が増えているのは何とも皮肉なことであった。

現に、学徒動員で駆り出された女子挺身報国隊の女学生が徴用工に強姦暴行される事件もあとを絶たず、空襲下の強姦事件も数多くあった。

軍の高官と遊女との情死事件、出征を悲しんだ新婚夫婦の情死事件など、戦争の規律に相反した男女

の事件が、随所で発生していたのであった。

尾形玉江の情痴犯罪も、この時代の一面を物語る事件の一つであった。

戦時の時勢柄、この風紀を乱す事件は秘された。

新聞の記事は戦意高揚の勇ましい文字ばかりを列ねていたのだ。

第一章 了